



明治時代の後半に、我が国でも富国強兵の為に自国での皮革工場が作られ、<日本皮革>や<山陽皮革>などの大型工場が操業を開始し、その原料となるタンニン剤をこの櫨の樹皮に求めました。

当時の北海道に群生する櫨木の樹皮からタンニン剤を得るため、現地にタンニン工場を作ったのですが、たったの2年でその地域に育成する樹齢80年以上の櫨木を全て伐採しつくしました。

植林にも失敗した為、その後は櫨樹皮を用いた革作りは途絶えています。

オーク木もこれと同じ運命を辿っています。

イギリスでは、18世紀半ばから始まった産業革命により人々の生活は豊かになり、中産階級が激増しました。

当時まで牛は貴重な労働力で、それを食べる事などなかなか出来ない事でした。

ところが産業革命により新たな動力源が発明され、牛の動力に頼る必要がなくなりました。すると、イギリスの中産階級がこぞって牛肉を食べるようになったのです。

動力としての使命を終えた牛は、食材としての地位を獲得していったのです。

牛肉を食べれば必然的にその皮が出ます。

当時のタンナーは羊や鹿などの中動物の皮を中心に鞣しを行っており、牛の皮は時々しか出ないので、タンニン剤の供給も問題ありませんでした。しかし、急激に牛の様に大きな皮を鞣す事となり、多量のタンニン剤が必要となりました。

この辺りからは想像が付くと思いますが、ヨーロッパではオーク木の伐採が続き、終にはオーク木が消え、それに代わる木を求めてタンニンの新素材探しが始まります。

オーク樹皮の代わりに目をつけられたのが Chestnut 木です。この木は樹皮ではなく木部にタンニンを多く含んでいます。

フランスのリヨンと言えば絹織物で有名な所ですが、ここでは Chestnut 木からタンニンエキスを抽出し、絹の増量剤として、

または黒色染色剤として使用していました。

絹は重量で売買されているので、絹の品質を変えない程度の増量剤として Chestnut エキスが使われていました。これは現在でも同様ですが、今では植物タンニン剤の代わりに合成タンニン剤が使用されています。

余談ですが、このリヨンに絹糸を輸出していたのが、世界遺産になった富岡製糸工場です。

植物タンニンは鉄イオンなどの金属イオンと反応して黒く発色します。

リヨンでも絹糸に Chestnut エキスを含浸させた後に鉄イオンと反応させて黒く染めていました。

昔の壺に入ったインクなども植物タンニンエキスをを用いた物です。

この Chestnut 木もオーク木と同様の運命を辿っています。

Chestnut の木の実には マロングラッセでお馴染みの栗で、当時の木は樹齢80年~100年ぐらいの木が中心だったと言われています。オーク木の代わりという事で、次々と伐採され今では古木の枝の直径が15cm以上になった物を切って使用しています。特にイタリアの革底靴が流行すると、需要が急増します。

この Chestnut も価格上昇と原料不足から代替えを探し、次に候補に挙がったのが ミラボラム、または ミラボラン と呼ばれるタンニン剤です。

これはインド・スリランカ原産のテルミナリアチェラブラと言う木の実から採取します。独特の香りを持つタンニンで、Chestnut の代わりとして使われる物です。

元は植民地と言う事もあって、イギリスでの使用が多いですが、果実を乾燥させ、その果肉からタンニンを抽出するので、これまでの例の様に伐採し尽くす事はありません。しかし、果実の事なので、毎年豊作とは行かず、収穫量に増減はあります。